

広報室インタビュー① 渡辺利夫学長に聞く「拓大改革プラン」

本年度より学長職に就任された渡辺利夫新学長。
後期授業もはじまり、いよいよ年度の佳境を迎えた現在と学長の目指す教育方針、
その改革プランをインタビューしました。

● 全人教育の再生と学生の満足度 ●

・・・学長に就任されて半年が過ぎました。学部長と学長では、やはり違うものですか。

渡辺 違いますね。忙しいのは同じですが、学部長は現場監督。学長は全学的な視野で眺め、行動しなければなりませんからね。

・・・拓大をどう変革していこうとお考えですか。

渡辺 私は「拓大を変えれば日本が変わる」と思います。拓大生は日本の若者の平均的存在だということです。東大や京大を改革しても、日本は変わりません。しかし、日本の平均的な若者の知的レベルを上げれば、日本は確実に変わります。拓大をどう変えるか。以前から学内でも改革のプランはたくさん出ています。

ところが、いろいろの事情があつてのことでしょうが、これらはほとんど実行に移されていない。私は、私が合理的だと思えるプランはすべて、任期中に実行するつもりです。

・・・具体的にいうと、どんなプランですか。

渡辺 私がかつても大事だと考えているのは1年生、それも1年生の前期です。ここで学問の面白さ、キャンパスの楽しさや幸せを味わえた学生は、その多くがよい学生として世に出て行ってくれます。しかし、ここで脱落すると、良い形で卒業はむずかしい。そこで「入口」をどうするかが、最初の大きなテーマです。拓大では入学して最初の1週間、河口湖でのキャンプを含めていわゆるオリキャンをやっています。

まず、これが非常に重要です。地方から東京に出てきて、大学に入り、友だちや教師に初めて接する。大学ってどういうところだろうという不安と期待の混じった複雑な気持ちの時期です。優れたガイダンスをして、学生によいものを植え込む。とはいっても1週間ぐらいでは、すべてをガイドできるわけではありませんから、これを1年のクラスゼミ、学部によっては基礎ゼミといいますが、これにオリキャンのクラスをつなげます。

これには全教員が関わってもらいます。しかも、学生にはこのクラスゼミに入れば単位を与えたい。入学後の1年間、同じ教師のもとで、密度の濃い人間的な交流を心がけねばなりません。そうしなければ専門課程に進んでも学生が上手く育つとは思えません。

・・・学ぶための下準備をしっかりやるということですね。

渡辺 マナーも含めた「全人教育」の再生です。社会に出てしまつたら誰もこんなに親身になって教えてはくれません。学生にとって大学は教育の最後の機会ですからね。



渡辺利夫学長

・・・ほかにはどんな改革をお考えですか。

渡辺 学生による授業評価を見直します。拓大のこの制度は準備段階も入れると10年以上の歴史があります。これを形だけでなく、実を伴うようにしなければいけません。評価自体は目的ではありません。評価の結果に基づいて授業のやり方を改善することが目的です。評価、改善、改善、評価というサイクルを恒常的に作り出すことが重要です。

そこで、同じ学問分野の教員がチーム（クラスター）を作り、相互に評価し合い、改善策を練り、学部長を経てこれを学長に提出する。互いに授業も参観し合う。改善策をまた教学の現場にフィードバックする。そうして授業評価に魂を入れたいのです。

さらに、オフィス・アワー制度を導入します。これは学生が先生の研究室にアポなしで行ける時間帯を週3回設定するというものです。学生はその時間内であれば質問や相談が自由にできます。昔は大学の先生といえば雲の上の存在で、めったに近寄れなかったけれども、いまはそうであってはいけません。学生の満足度を高めるためのサービスを徹底しなければなりません。

忘れてはならないのが基礎教育です。工学部を中心に実施を予定しています。高校の数学のOB先生の力を借りる、あるいは予備校の先生を頼むなどして、カリキュラムの外に基礎教育のシステムを作ります。

スクラップ&ビルドによる「強化」

・・・カリキュラムではどんな改革をしますか。

渡辺 ゼミナールの拡充です。ゼミはかなり充実してきていますが、ゼミがキャンパス・ライフの中心になるような仕組みにします。学生は全員ゼミに入ってもらい、教員も全員にゼミを持ってもらう。学内の連絡事項もすべてゼミの教員を通じて行うようにします。学生の不満などもゼミから吸い上げてもらうようにします。

それから、 Semester制を全学部で徹底します。いまやひとつの科目を1年もかけてやる時代ではありません。授業期間を圧縮して、パンチ力のある授業を展開しなければなりません。そうすれば学生の履修科目選択の範囲も一段と広がります。さらに学部の垣根を越えて認める単位数を増やせば、学生の選択範囲はもっと広がります。学生にも教員にも競争原理を働かせることが目的です。

また、カリキュラムの中には時代の要求にマッチしていないものが少なくありません。スクラップ&ビルドが必要です。

・・・再編ということですか。

渡辺 統廃合もあり得ます。逆に再構築を考えないと大学は生き残ってはいけません。

スクラップ&ビルドのうちのビルドの話をしてみると、政経学部の法律政治学科が再来年に初めての卒業生を出します。これに合わせて大学院に地域行政研究科（仮称）を新設します。地方分権の時代といいますが、行政能力のない地方は大変なことになりかねません。地方行政の人材を育てるための大学院です。

それから商学部に会計学科を新設します。これも再来年からです。拓大は税理士や会計士では非常に層の厚いネットワークを誇っています。拓大の「強み」です。そこで少数精鋭主義の会計学科を作り、「強み」をさらに強化します。将来は大学院をも作って、これにつなげたいと考えています。

「強み」ということでいえば、日本語教育でも拓大は全国有数の大学です。ただ、留学生別科があり日本語学校があり、学部でも日本語教育をやっている。あっちこっちでいろいろやっていて、日本語教育の顔が見えてこない。日本語学校を廃止して、留学生別科に統一することにしました。留学生別科という名称も変えたほうがいいかもしれません。それを含めて現在検討中です。

拓大の地域言語教育に対する社会のニーズは非常に高い。そこで、語学センターのような機能的組織を作ろうと考えています。これは、必要なときに必要な教員が集まって、そこで語学教育を行い、終わればまた解散する。そのための機能の「容器」ですね。

・・・大学は教育機関であると同時に、研究機関でもあるわけですが、研究の面ではいかがですか。

渡辺 私は圧倒的に教育を重視していますが、研究の分厚い基盤がなければいい教育ができないのは言うまでもありません。2000年からいままで、一度も学術論文を発表していないような教員には警告信号を出します。厳しいと思われるかもしれませんが、研究費だけもらって研究はしていないなどというようなことは許されません。ただ、あまり懲罰的なことばかりでは、知的雰囲気が高揚しない。

そこで、学部・研究所を横断する大きなテーマの研究プロジェクトを立ち上げる。たとえば「少子高齢化」などというテーマは、経済学、経営学、社会学、そしてバリアフリーなどを考えれば工学部のテーマでもある。また「BRICS」、つまりブラジル、ロシア、インド、中国、これから勃興してくる大国ですね。これが開発論上の大きなテーマになろうとしています。

これを国際開発研究所、海外事情研究所、政治経済研究所、その他の、共同研究のテーマとし、成果を商業出版する。いま研究所では紀要を出していますが、あれだけでは不十分です。やはり多くの研究者と一緒に仕事をして、議論をして、汗をかいてこれを社会に発信しないと、大学としての一体感がなかなか出てこないと思います。

・・・いまお聞きしたようなことを実行していくことで、大学の改革を一段と進めるということですね。

渡辺 すぐに効果が出るとは思われません。キーワードは「学生の満足度」の向上です。学生諸君にこの大学に来てよかったと思ってもらうような大学にするには、数年を要しましょう。8年、10年というサイクルで考える必要もあります。特効薬という点では、私は広報を重要視しています。大学の顔を外に見せる、その見せ方ですね。拓大ではアジア塾をはじめいろいろな社会人教育講座を開いていますが、受験生だけではなく、社会人をどう大学に取り込むか、これには広報の力が大きい。広報をより充実させたいですね。

・・・ありがとうございました。

●「学長室の窓から」●

【URL】 <http://www.takushoku-u.ac.jp/Stu/Pr/index.html>



「学長室の窓から」のサイトは、学長の紹介や学長からのメッセージ並びに学長のリーダーシップによる本学における教育・研究等の改革・改善の取り組み(授業評価報告書、自己点検・評価報告書、教員毎の教育・研究等業績一覧など)を、学内外への情報発信のために開設されているものです。